

令和2年
2020年

月のポイント

にほんがつき
日本の楽器

おわりとくがわけとのう
尾張徳川家の殿さまは能だけでなく、雅
樂や平曲(平家琵琶)にも関心がありました。
また、姫さまたちも琴や三味線を弾きました。
・三味線、琉球王から贈られた琉球樂器などさまざまな樂器が伝えられました。

1 神さまに捧げる音楽
くにぶりのうまい
「国風歌舞」

雅樂が日本に伝わる前の、飛鳥時代から奈良時代にかけて、日本で行われていた踊りや音樂を「國風歌舞」といいます。國風歌舞の音樂や踊りはおもに宮廷や神社のお祭りで、神様に捧げされました。

和琴は日本で古くから伝わる六絃の琴で、「やまとごと」ともいいます。弥生時代、膝の上で和琴を弾く埴輪が多くみられます。琴軋という籠甲の片を右手に持ち、絃を引き鳴らしたり、左手で弾いて演奏しました。

2 宮廷の式楽 雅樂



雅樂は中国や朝鮮半島などから日本に伝えられ、日本の宮廷の樂舞として、奈良時代から演奏され続けてきました。雅樂は10世紀以上も昔の曲や舞、樂器を受け継いでいます。

雅樂は合奏だけの「管絃」と、美しい装束をつけた舞と合奏が一体となつた「舞樂」の2種類に大きく分けられます。管絃は西洋音樂のオーケストラにあたり、3種類の管樂器、2種類の絃樂器、3種類の打樂器が使われます。このような樂器編成は、「三管、兩絃、三鼓」と呼ばれています。

3 へいけびわ 平家琵琶

平家琵琶は『平家物語』の語り「平曲」の伴奏に用いた樂器です。雅樂用の琵琶と造りはほとんど同じですが、持ち運びの便利さなどから、雅樂用より小型です。撥は雅樂用の琵琶の撥に比べると大きく、絃を弾く先端の開きが広いのが特徴です。

雲龍文螺鈿琵琶 (No. 31)

平曲用の琵琶ですが、樂器の飾りは琉球（現在の沖縄）で施されたと考えられます。黒い漆の地に南方産の夜光貝を用い、表に雲や龍、背面には菊唐草を表しています。



4 のう 能の樂器

能は謡といふ力強い声楽と、笛と小鼓、大鼓、太鼓による樂器の演奏と、能面をつけて踊る舞踊による舞台演劇です。室町時代に観阿弥、世阿弥という親子が芸術的に完成させました。

旋律樂器である笛と打樂器の小鼓、大鼓、太鼓は四拍子と呼ばれます。能の囃子は単なる演奏ではなく、役者と対等にわたりあう重要な音樂です。

江戸時代、武家や上流階級の間では、これら四種類の樂器の演奏は嗜みとして親しまれ、尾張徳川家でもお祝い事や年中行事に能が上演され、能面や能装束とともに、能樂用の樂器も伝えられています。



笛 のうかん より呼ばれ、素材は竹で漆が塗られています。



小鼓

馬の革を張った表革と裏革とで胴をはさみ、麻の調緒で締めます。



大鼓

小鼓と同じ材質で、小鼓よりやや大きく、胴の中心に筋があります。



太鼓

革は牛革、2本の撥を振り下ろし、明るく力強い音色を出します。

にほん がっさき
日本の楽器

5 姫君たちの教養 箏と三味線

箏とは、現在では「琴」と呼ばれ親しまれている十三絃の楽器です。日本には雅楽の楽器の一つとして、7世紀末に中国から伝わりました。平安時代以降、身分の高い女性が和歌や手習とともに、箏を学びました。

また、琉球の三線が日本にもたらされ、改造されて定着したのが三味線です。三味線は箏や胡弓とならんで、女性が学ぶ教養の楽器「三曲」の一つです。徳川美術館には尾張徳川家の姫君たちが弾いた箏や三味線も伝えられています。



No.52

箏 銘 小町
高原院春姫（尾張家
初代義直室）所用

6 琉球樂器

琉球の宮廷音楽は中国の明・清時代の宮廷音楽が元になっています。琉球王の居城・首里城で演奏されたほか、琉球王や將軍の代替わりの時に、琉球王の使節とともに楽人の一団が江戸城に行き、將軍の前でも演奏されました。



尾張徳川家伝来の琉球樂器は、寛政8年(1796)に薩摩(鹿児島県)島津家から贈られました。

No.89 琉球歌舞音楽図巻

